

[追悼]

## 小林巖雄さんを悼む － 思い出と共に －

神谷英利\*



化石研究会の創設（1959年）からの会員である小林巖雄さん（新潟大学名誉教授）は、2020年4月11日に逝去されました。享年83歳でした。謹んで哀悼の意を表します。

小林さんは1936年、東京のお生まれで、私立聖学院中学校、同高等学校（東京・駒込）を卒業後、東京教育大学理学部地質学鉱物学（地鉱）専攻に入学されました。入学の経緯を詳しく伺ったことはありませんが、兄君の小林宇一さんも同じ地鉱のご出身で、高校の地学の教員をされていたので、その影響があったのかも知れません。

私が同専攻に入学して小林さんと関わり合いを持つことになったのは、学部3年生の頃ですが、小林さんはその時すでに博士課程を修了し、「二枚貝の貝殻構造」を研究テーマとしておられました。したがって、それ以前のことはあまり良く知りませんが、卒業研究（卒論）では宮城県仙台市西方の丘陵に分布する「白沢層」の野外調査を行い、その層相変化および堆積環境を明らかにしました。その結果は地質学雑誌の第68巻3号（1962）および同第68巻4号に掲載され、引き続き同第5号には、仙台市南方に分布する珪藻土層中

の化石珪藻群落についての研究も公表しています。

このように、小林さんはのちに古生物学の近代化を目指して、「化石の微細構造」の研究の先端的な役割を果たしていくことになるのですが、その前の段階では、野外調査に基づく非常にしっかりとした地質学的研究を行っていることが判ります。これは、大変重要なことで、例え、実験室内で機器を使った分析的研究をしていても、常に研究対象である化石の地質学的な意味を念頭に置くことが必要で、それは野外の地質学的調査によって、培われるものです。これは、指導教官であった大森昌衛先生や藤田至則先生がお考えだったことで、不肖、私も後に似たような道筋を通ることになりました。

1959年に同大学を卒業し、大学院に進学後、修士課程では地質学的研究を主としましたが（指導教官：藤田至則先生）、博士課程に進むと、化石二枚貝の殻（貝殻）の微細構造と進化に関する研究をおもなテーマとすることになりました（指導教官：大森昌衛先生）。それまで野外でハンマーを振るって石をたたいていた人が、室内で貝殻の微細組織やそのほかの生物学的特徴を観察することになったのだから、大変な苦労があったに違いありません。具体的には、現生の二枚貝についての知識や電子顕微鏡による観察法を学ぶために、現在の三重県志摩市賢島にあった国立真珠研究所に内地留学したほか、東京歯科大学（田熊庄三郎教授の研究室）の委託研究生となって、硬組織の研究手法を勉強するなど、関連分野の手法の獲得する努力をされました。当時、東京教育大学の森研究室には、佐藤敏彦氏、秋山雅彦氏らがおられ、佐藤氏はサンゴを中心とした硬組織の研究、秋山氏は化石の有機物の研究（古生化学的研究）を進めておられました。また、資源科学研究所では藤原孝代氏が脊椎動物の歯を作る燐灰石（アパタイト）の研究をされており、1959年に設立された化石研究会の例会や会員が中心となったゼミなどで、これらの研究成果の発表や意見交換、研究の相互援助が活発に行われ、古生物学の近代

\* 〒612-0841 京都市伏見区深草大亀谷東久宝寺町12-10

E-mail : kamiyahy@ybb.ne.jp

化への努力がされていました。小林さんは、このような状況の下で二枚貝の微細組織と系統分類との関わりについて研究を進め、1964年に博士論文をまとめられました。題目は「Introductory study on the shell structure of bivalvian molluscs」です。この研究の成果は広く海外の関連分野の研究者によって評価され、「日本の貝殻構造研究の小林」として、知られるようになりました。

ここで少し話題を変えますが、「貝殻の微細構造の研究」などをやっているとき、毎日、貝殻の薄片を顕微鏡でのぞいたり、電顕で観察したり、鉱物組成を調べたり、名前に巖と言う字があるし、かなり「頭の固い人」のように思う人もいるかも知れませんが、小林さんは「意外に」そうではありませんでした。多くの人から通称「ガちゃん」と呼ばれていて、私は6歳も年下ですが、さらに私より10歳も若い人たちまで、そう呼んでいました。まじめですが、何か「すっ呆けた」ところがありました。また、若い人の面倒見も良く、かなり粘り強い性格でもありました。ある時、大森研究室の夕方のゼミか、例会のあとかに、池袋で「コンパ」をやったのですが、後から来る予定の小林さんに店の名を伝えるのを忘れてしまいました。会が始まってから気が付いたのですが、もう、遅い。皆が悪いことをしたなど、言っていたところへ、小林さんがひょいと顔を出して、「あ、いたいた」。聞けば、我々が行きそうなところを、何軒も回って、ついに探し当てたとの事で、一同、驚くやら、感心するやらでした。

「すっ呆けた」失敗例もいくつかありますが、例えばアメリカ・サウスカロライナに渡部啓光先生を訪ねられた時、日本から行くにはアメリカのどこかの空港で乗換えますが、乗換えて到着したら、どうも様子がおかしい。係員に航空券の半券を見せて聞くと、「あんた、これぜんぜん違う所だよ」。しかし、行く先の違う航空券でそのまま乗れたのだから、すごい時代でしたね。

渡部先生は世界的に知られた微細構造、生体鉱物の研究者で、日本の研究者も多数お世話になって来た方です。東北大学岩石鉱物鉱床学科で真珠の鉱物学的研究で知られる大森啓一教授の指導を受けて、この分野に進まれました。1957年に渡米されてから今日まで60年以上もアメリカで研究生活を送って来られました。現在は、サウスカロライナ大学特別名誉教授で97歳と言うご高齢ですが、2017年につくば市で開かれたThe 14th International Symposium on Biomineralization（第14回国際生体鉱物化シンポジウム）には、94歳の高齢にもかかわらず参加されました。

さて、小林さんは1968年（昭和43年）5月に新潟大

学（地質鉱物学科）に赴任されましたが、それまでは学術振興会奨励研究員ほかの立場で東京教育大におられたので、その間に多くのことを教えていただきました。私の最初の公表論文は小林さんと共著のアカガイの貝殻構造に関するもので、私はある程度の「お手伝い」をしたに過ぎませんが、連名と言う形で配慮して下さったものです。新潟大学着任後は、化石の微細構造の研究に加えて、新潟堆積盆地の新第三系、第四系の地質学的研究も大きなテーマとして加わり、さらに幅広い領域で研究活動を展開されました。大学の教員たちや新潟の小・中・高の教員の方たちも含めた地域の団体研究にも積極的に取り組まれました。

化石の微細構造の分野では、海外において多くの研究者によって、「Biomineralization」の観点からの研究が盛んになり、1970年にはドイツのマインツ（Mainz）でボン大学のエルベン（Erben）教授の主宰により、The First International Symposium on Biomineralization（第1回国際生体鉱物化シンポジウム）が開催され、日本から大森昌衛先生と小林新二郎先生（北海道大学）と和田浩爾先生（真珠研）の3名が参加されました。当時の日本の大学では、東京大学などごく一部の大学を除いては、直接的な研究の国際交流を行う条件に乏しく、教官や院生が外国で開催される国際学会に参加することは簡単ではありませんでした。大森先生もヨーロッパでの国際学会に参加するのは初めてのことでしたが、小林さんを始めとする私たち研究室のメンバーの連名による、貝化石の微細構造に関する総合的な研究成果を発表され、日本でもこのようなすぐれた研究があると言う評価を受けました。この成果が、7年後の1977年に三重県賢島で第3回のシンポジウムが開催される布石となったのです。

The 3rd International Symposium on Biomineralization（第3回国際生体鉱物化シンポジウム）は、1977年秋に真珠の養殖で有名な三重県の賢島<sup>かしこじま</sup>で開かれました。会場は近畿日本鉄道（近鉄）のセミナーハウスで、テーマはThe Mechanisms of Biomineralization in Animals and Plantsでした。主宰者は大森先生ですが、小林さんは運営事務局として研究集会を実行する上で中心的な役割を果たされました。国際学会の開催準備や運営などやったこともない人間ばかりだったので、大変な苦勞がありました。海外から約30名、国内から約70名、あわせて約100名が参加して、盛り上がった国際研究集会になりました。内容的にも非常に充実しており、日本の高いレベルの研究成果が海外に広く伝わり、かつ、評価される場となりました。

これ以来、ほぼ4年に1回の間隔で開催されているこの国際集会が、第6回（小田原、1990年）、第8回（新潟・黒川村胎内、2001年）と立て続けに日本で開

かれましたが、新潟・胎内の第8回集会は小林さんが主宰されたものです。日本で国際学会を開催する時に一番大変なのは「経費」ですが、小林さんはあちこち奔走されて、いろいろなところから資金を集められ、賢島の第3回はるかに上回る大きな規模の集会でしたが、最終的には「黒字」とすることが出来ました。新潟地域での小林さんの日頃の諸活動の結果が表れたものと思います。この集会は新潟市内から車で1時間もかかる、かなり交通が不便なところだったので、外国からの参加者の中には到達するのにかなり苦労した人もいたようですが、地元の人たちと一緒に盆踊り大会や野外での「牛の丸焼き」パーティーなどで、おおいに盛り上がりました。そして、参加者全員がそのもてなしで大満足したようで、小林さんの人と為りをうかがい知ることが出来ました。その成果は、Kobayashi I and Ozawa H (editors) *Biom mineralization (Bio2001)-formation, diversity, evolution and application*, Tokai University Press, 399p. 2004として、出版されました。

私は研究テーマが小林さんと関連する面が多かったので、京都に来てからも海外の国際学会と一緒に出かけたり、共同発表をすることが結構ありました。最後にご一緒したのは、2005年に南米・チリのプーコン (Pucon) であった第9回シンポジウムでした。プーコンは南北に長く伸びるチリの中でも、かなり南に位置し (南緯71度)、富士山のような美しい形をしたビジャリカ火山の麓にあります。湖にも面しており、チリでは有名なリゾート地ですが、日本からそこに行くまでが大変でした。成田からカナダ・トロントまで1泊夜行便、トロント空港に早朝着き、空港内で夕方まで待って、チリ・サンチャゴへ行くのにまた1晩の夜行便。おまけに、サンチャゴから戻って来る飛行機が遅れたため、トロントでさらに6時間待ち。サンチャゴに着いても乗り継ぎの国内便はすでになく、さらに数時間待つことになってしまいました。小林さんも相当疲れたと見えて、日頃口数の少ない人がいっそう無口になって、旧知の外国研究者に会っても、あまり、会話をしないほどでした。しかし、学会が開催された12月初旬は、チリは初夏のさわやかな季節で、風光明媚な自然環境のもと、学会期間中、毎日チリワインを楽しむことが出来ました。

日本への帰途は乗換地のトロントでいったん降りて、トロント・ヨーク大学生物学教室のサリーデー教授に会うために、4日間滞在しました。同氏はバンガラディッシュの出身で、英国のレディング大学 (University of Reading) で学んだ人ですが、1977年の賢島シンポジウム以来、大の日本ファンになって、胎内のシンポジウムにも参加し、さらに別の機会にご夫妻で京都を訪れたこともあります。車でナイアガラ

の滝に案内してもらったり、自宅に呼ばれて夕食をいただいたりしましたが、懇談中も小林さんはあまりと言うか、ほとんどしゃべりません。サリーデー氏は「Kobayashiはいつもしゃべらないからな」などと笑っていました。昔から「余計なことはしゃべらない」方で、若い時はお酒が入った時には結構しゃべりましたが、歳とともにいっそう寡黙が進み、「必要なことも話さない」ようになった面があります。これは、時に他の人に誤解を与えることもあったように思います。

以前、同じく新潟大教授の友人と話をしていた時、同じ学科で20年以上も一緒にいて、小林さんが化石の微細構造や *Biom mineralization* の分野で、国際的に知られた仕事をして来たことを、全然知らなかったの、相当驚きました。新潟大の教官になってからは、大学の置かれた地域の特性を生かした研究や、地域への貢献の観点から、微細構造だけでなく、新潟地域の地質学的研究も大きな研究課題となりましたが、化石の微細構造や *Biom mineralization* の研究は継続し、いろいろな成果を挙げていました。新潟大ではおそらく、そのようなことについて話をする機会に乏しく、学生の卒業論文のテーマは野外のフィールドが中心で、化石の微細構造のテーマで指導することもなかったと思われます。自分はこんなこともやっているよ、などと「余計なこと」は言わなかったのかも知れませんが、知らないと言う方も少しどうかとは思いますが。

小林さんご逝去の報を受け、すぐにサリーデー氏に連絡しました。すぐに折り返し以下のような返信がありました。

I am sorry to hear the passing of Professor Kobayashi. He was a nice person and an excellent scientist. I enjoyed his visit along with you in Canada. The trip to Niagara Falls was memorable. The dinner at the Italian restaurant and drinks at my house were enjoyable. We will miss him.  
Prof. Saber Saleuddin

同じく日本で開催した研究集會に何回か参加された女性研究者で、パリ・ソルボンヌ大学古生物研究センター教授およびパリ自然史博物館教授であるガスバードさんからも次のようなメッセージをいただきました。  
I just received your message and read it with a sound sadness  
I remember the friendly organizer and Great Figure of *Biom mineralization*  
... and also the appreciated Singer!  
We met several times in Odawara, during a workshop

of Biomin among several ones for the International Geological Congress, in Niigata, in Chile …

Please accept my sincere Sympathy and offer my Condolence to his Family and Colleagues

Sincerely Yours

Daniele (Dr. (HDR) Danièle GASPARD)

これを見ても、小林さんがいかに敬愛され、信頼されていたかが判ります。まさに、日本だけでなく世界における微細構造研究を開拓・発展させた牽引者のおひとりであり、日本における古生物学の近代化に貢献し、化石研究会の発展にも大きく寄与されました。2002年3月末に33年10ヶ月勤め上げた新潟大学を定年退職されてからも、同大学の立石雅昭さんのベトナムの調査に参加されたり、また、新津市にある「石油の世界館」の友の会で、新潟の石油と地質を中心に、地域での普及活動が続けられました。さらに、2011年頃

以降は、佐渡ジオパーク推進協議会の活動にも参画され、協議会の顧問と「調査研究報告書 佐渡の自然史」の編集長を務められ、2013年9月24日の日本ジオパークネットワークへの加盟認定や、その後の活動に貢献されました。

こしばらくは次々と大きな病を得られて大変な状態になりながらも、持ち前の粘り強さでがんばって来られました。個人的には、機会を得て、一度だけでもお見舞いにあがりたいと思っていましたが、それもかなわず亡くなられたことは、痛恨の極みです。ここにあらためて、「ガンちゃん」の長年にわたるご尽力・ご貢献に厚く感謝申し上げ、ご冥福をお祈り申し上げます。

なお、ご遺族は小林久子様（奥様）で、住所は以下の通りです。

郵便番号950-2075 新潟市西区松海が丘3丁目4-15